

## 論文

# 20世紀学習英和辞典

—その発展におけるパーマーの貢献—

早川 勇

### 要 旨

20世紀学習英和辞典の歴史を振り返ると、販売部数を伸ばすために辞書情報項目を細分化したり新機軸を導入することにより辞書編纂は一段と発展してきた。辞書の中核は語義説明や定義であるが、それを補う目的で新機軸が導入されることも多かった。1920年から80年代にかけて、学習英和辞典に導入された5点についてみたい。厳密な発音表記を目指した国際音声字母による音声表記（1920年代）、重要語の段階を示す見出し語への頻度順表示（1930年代）、文法情報提示のための可算・不可算表示（1950年代）と動詞型表示（1960年代）、コロケーションの例示（1980年代以降）である。程度の差はあるが、そのすべてをパーマーが手掛け、その基礎を築いた。そして、これらの点はホーンビー辞書において開花した。二人が目標としていた辞書は基本的に発信型の辞書で、英語を外国語として学ぶ日本人が基本語彙を使つて的確に自己表現をする際の指針となる辞書を目指していたからこそ、英和辞典の発展に寄与することとなった。1990年代以降の辞書編纂は、よりユーザー・フレンドリーを指向している。学習者を辞書編纂の中心に据えたパーマーの考えを見直す必要がある。

キーワード 学習英和辞典, 頻度順表示, 可算・不可算表示, コロケーション, パーマー, ユーザー・フレンドリー

## 0. 本論文の目的

筆者は『辞書編纂のダイナミズム』の第7章 (pp. 230-250) においてパーマー (Harold E. Palmer) からホーンビー (A. S. Hornby) に至る辞書編纂において確立された辞書学概念を検証した。本論文においては、専らパーマーに主眼を置き、彼が20世紀英和辞典の発展にいかに関与したかを通観する。このため、一部記述が拙著と重複するところがあることを前以て断っておく。

英和辞典の歴史を振り返ると、販売部数を伸ばすために情報項目を細分化したりすることにより辞書編纂は一段と発展してきた。辞書の中核は語義説明や定義であるが、それを補う目的で新機軸が導入されることも多かった。1920年から80年代にかけて、学習英和辞典に導入された5点についてみたい。国際音声字母による音声表記 (1920年代)、見出し語の頻度順表記 (1930年代)、可算・不可算表示 (1950年代)、動詞型表示 (1960年代)、コロケーションの例示 (1980年代以降) である。程度の差はあるが、そのすべてにパーマーが関与していた。

パーマーは1877年にロンドンに生まれた。父は学校の校長をしていたが、その後ジャーナリストに転身した。その子は、1885年にロンドン市内で行われた日本風俗博覧会を見に行き、日本に関心を持つようになったという。私立学校で学んだ後、1892年にフランスへ赴きフランス語を学んだ。イギリスに帰国後は父の仕事を手伝い記者としても働いた。1902年、ベルギーに渡り国際外国語学校で教師として働いた。このころ学習者の母語を使用しない直接教授法を学び、その信奉者となった。翌年、この学校をやめ独自の語学学校を設立し、自らも英語とフランス語を教えた。フランスにおいて外国語を教える人々の中から国際音声学協会が生まれた。まさに、パーマーはその中心にいたといえる。

## 1. 国際音声字母による音声表記 (1920年代)

音声学者として高名なジョーンズ (Daniel Jones) の発音辞典 (*English Pronouncing Dictionary*) が1917年に出版された。表記は国際音声字母による簡易表音法 (broad transcription) を採用した。イギリスでは1901-1914年の間にこの方式は流行し教科書などでも使われた。この辞書では約5万語の発音が表記された。記録された発音はイギリスにおいて最も一般的な南部の発音特にパブリックスクールで行われていたものであった。余り一般的ではない発音はほとんど削除されているが、複数の発音が記載される場合もある。この辞書ではイギリス英語の中核となる語がすべて表記されたため、イギリス英語の発音として最も権威あるとされた。

この辞書の表記は外国語として英語を学ぶ日本人にも比較的分かりやすい簡易表記であり、当時としては国際音声字母を用いて5万語も表記した辞書はなかったので、日本の英和辞典編纂者にとってこの上ない恩恵となった。日本で最初に国際音声字母による音声表記を行ったのは藤岡勝二『大英和辞典』(第1巻, 1921)である。アクセントのある母音を太字で示すなどの工夫をこらした。この辞書の第2巻刊行は関東大震災のために1932年と遅れた。国際音声字母による表記を一般に広めたのは、『袖珍コンサイス英和辞典』(神田乃武・金沢久, 1922)と『英語発音辞典』(市河三喜, 1923)である。

このように、日本では国際音声字母による音声表記といっても、国際音声学協会のものでなくジョーンズ式のもの指すのが一般的である。ジョーンズの音声表記を日本に普及させるのにパーマーが果たした役割は無視できない。彼はベルギーでフランス語を教えていたが、1914年に第一次大戦が勃発したためイギリスに引き上げた。ロンドンに移り住み、1915年にジョーンズの推薦でロンドン大学の University College 夜間部で語学教授法を教えることとなった。彼はジョーンズのもとで音声学特にイントネーションの研究に従事した。このころの音声学関連の業績としては‘What is Phonetics? An Answer to this Question in the Form of 12 Letters from a Phonetician to Nonphonetic Friend.’ (1914, 英語教授に関する雑誌に発表) や *A First Course of English Phonetics* (1917) などがある。1921年、日本へ招聘された。翌年の3月に来日した。その後、語学教授法について日本の英語教師を対象に全国で講演などを行った。パーマーの推奨するオーラル・メソッドや英語音声学について熱く語った。彼の学問的内容および来日の期日から、彼が恩師ジョーンズの発音表記を日本人英語教師に奨励したと考えるのが自然であろう。これによってジョーンズ式の発音表記は全国に広まった。間接的にはあるが英和辞典の国際音声字母による音声表記を後押ししたといえる。なお、パーマーのために設立された英語教授研究所では発音記号のための活字を独自に製造させたことも付記したい。

ジョーンズ発音辞典をもとにして市河三喜は『英語発音辞典』(1923)を編纂した。彼はイギリスでジョーンズのもと音声学を学んだので、ジョーンズの発音辞典を「この種の辞典では今迄出たものゝ中の白眉であると云つて宜しからう。」(p. v)と絶賛した。さらにこう述べている。「万国音声学会の一音一字主義に基いて作つた極めて科学的な音字であつて、英語のみならず孰れの国語でも正確に表はし得るものである。故に近時甚だ盛んになつて信頼すべき語学書類は全然この式又はこれに些小の変更を加へたものがその全部を占めてゐると云つて過言でない。」(p. vi) 正確にはジョーンズ式の簡易表音法である。市河は、すべてジョーンズ発音辞典を典拠として発音を表記した。ただし、アクセントの表記については母音の上にアクセント記号をつけた。この書は英語の発音に関する専門辞典であるが訳語も簡単に示されていたので、英和辞典としても手軽に利用されたようである。

市河三喜とパーマーはともにジョーンズのもとで音声学を学んだこともあり、日本でも関係が深い。関東大震災後、パーマーの研究所が1924年になってやっと本格的活動を再開した折りも、顧問として市河三喜は名を連ね、一緒に講演旅行などもしている。また、1935年にパーマーは*A Grammar of Spoken English*によって東京帝国大学から文学博士の学位を授与されるが、その主査を務めたのが市河である。市河はその後、同研究所の所長も務めた。このような人間関係からも、パーマーが日本における国際音声字母による音声表記の先駆けとなり、その普及に努めた功績は大きい。それが、結果として、英和辞典における国際音声字母による表記へとつながっていった。

日本においてこの表記はその後もしばらく引き継ぎ行われている。戦後アメリカ英語が入って来ても、ジョーンズ式の音声表記が行われた。この表記は日本人英語学習者のあいだではきわめて一般的であるが、英米においてはこれまで異なった音声表記が試みられてきた。20世紀終わりになり、イギリスでも母国人を対象とする英語辞書においてこの表記が利用されるようになった。

## 2. 見出し語の頻度順表記 (1930年代)

1910年頃、英米において速記者や盲人を助ける目的で語彙制限の運動が起こった。その後、教育上の必要から語彙制限が試みられた。ソーンダイク (E. L. Thorndike) は *The Teacher's Word Book* (1921) で、41種類の調査資料に含まれる400万語から読書用の語彙として1万語を統計的に選定した。頻度に加え分布を基準とし、1932年には最初の1万語を改良拡大し2万語の語彙表を発表した。出現の範囲によって各語に1から20までの評定をつけた。さらに、意味を単位として使用頻度を調査した。I. Lorge & E. L. Thorndike: *A Semantic Count of English Words* (1938) である。

パーマーが所長を務めた語学教育研究所では、語彙3000語の選択基準を確立し調査に着手し、第1回報告書を1930年に発表した。パーマーは語彙選択において日常の言語生活が支障なく行えることを念頭においていたので、この3,000語を用いて多くの教材を作成した。さらに、この3,000語のなかから了解だけでなく発表の点からも最重要の1,000語を選定し、第2回報告書を1931年に出した。パーマーの語彙表は世界的にも高く評価された。パーマーがウェスト (Michael P. West), フォーセット (Lawrence Faucett) らと合議した *Interim Report on Vocabulary Selection for the teaching of English as a foreign language* (1936) では、語彙選択の基準として、使用頻度・言語体系における価値・地理範囲を考慮した普遍性・幅広い使用範囲・定義に役立つ語・造語力・特定に傾かない文体の7点を挙げた。

パーマーの語彙選択は使用頻度も参考にし、日本での英語教育の経験と実践を考慮して行われた。この方法は経験主義的であったので実用価値は高かった。しかし、1,000 語および3,000 語の重要語は選択されたが、それ以上の語彙については重要度が示されることはなかった。むしろ、パーマーはその必要を感じていなかったのかもしれない。一方、ソーンダイクの頻度を中心とする方式に問題があることは認識されていたが、統計的な処理には数字の裏付けがあった。このため、パーマーやウェストの語彙表は辞書編纂に活かされることはほとんどなく、専らソーンダイクの語彙表が利用された。

日本の英和辞典にソーンダイクの語彙表が最初に本格的に採用されたのは『スタンダード英和辞典』(竹原常太, 1929)であろう。ソーンダイクはリーディングの面で、またホーン (Ernest Horn) はライティングの面で研究を進めてきたが、この辞書においては両者を合わせた表記を施したと竹原は強調している。1 万語を 10 群に分け数字によって頻度を示した。その後『ダイヤモンド英和辞典』(三上節造, 1932)『ソーンダイク基本英語単語』(竹原常太訳, 1934)が続くが、その普及に最も貢献したのは『最新コンサイス英和辞典』(石川林四郎, 1938)と『双解英和辞典』(斎藤静, 1944)であろう。注目すべきは、これらの辞書がすべて学習用または中型の辞書だという点である。ソーンダイクが問題とした語彙は 1 万ないし 2 万であったので、当時の中学生を対象とする学習英和辞典では欠かせない辞書情報項目となった。

語彙レベルを示すのに、当初は数字で表わすものが多かったが、後には星印などで目安を表わすようになった。見出し語の活字の大きさや各種書体で表わすこともある。いずれにせよ 1,000 語を一単位とする統計的記述は退けられた。この流れは、1000 語・3000 語を一つの区切りと考えたパーマーの経験主義に通じるものがある。

### 3. 可算・不可算表示 (1950 年代)

可算名詞と不可算名詞の記号表示について考えたい。C と U の略号は、イエスペルセン (Otto Jespersen) が考えた countable と uncountable の用語によると言われている。この文法用語が初めて用いられたのは *Modern English Grammar II* (1914, p. 121) においてである。“Names of countable immaterial objects may be thus used as mass-names.” この用語を最初に辞書に採り入れたのはパーマーであろう。これと関わる点について、彼は *A Grammar of English Words* (1938, p. vi) でこう説明している。

One of the greatest difficulties encountered by foreign students of English is to know when a noun refers to a thing that can be counted (e.g. a book, a house, a

moment, an advantage, etc.), or to something that cannot be counted (e.g. water, snow, weather, bread, wisdom, dryness, etc.). For it is not enough (nor is it true) to say that the names of material substance and abstract things are used without *a* or *an*, and that they are not used in the plural.

ただし、実際の辞書の記述においては countable の表示はほとんど使われていない。複数形で代用しているからである。

**danger** ['deɪndʒə], dangers ['deɪndʒəz], *n.*

複数形を提示すれば、必然的にその語は countable だということになる。このため、uncountable な語と特殊な語についてのみ可算・不可算の表示が行われる。

**attention** [ə'tenʃn], *n. Rarely countable*

**proof** [pru:f], proofs [pru:fs], *n.*

1. *Uncountable. The general idea of showing that a thing is true or not*
2. *Countable. Circumstance, event, happening, etc., that proves something.*

**surprise** [sə'praɪz], surprises [sə'praɪzɪz], *n.*

1. = emotion, wonder, astonishment. *Uncountable*

この語彙文法を中核とするパーマー辞書のあと、1940年に出版されたのがホーンビー・石川林四郎共編『基本英語学習辞典』である。ここでもパーマー辞書と基本的に同じ方法が採られている。数えられない名詞に《(不算)》の記号を付した。「実際になるとこの二つは随分見分け難く、比較的容易な名詞についてさへその判断は容易ではない。随つて、英語を読む時はさまで気にかけないが、一旦英語を書いたり話したりする必要が起こると、或る名詞は複数にすべきか単数にすべきか、或は複数にしてよいか悪いかといふことが問題になつて来る。所がこんな点を明かに示してくれる辞書は今の所殆ど見当らない。よつて本書では各名詞にこの点を明かにしておいた」(p. viii) この言葉からこの辞書が発信型辞書を指向していたことがわかる。この学習辞典が、日本において最初に可算・不可算の表示を行った辞書ということになる。

さらに、可算・不可算の表記を発展させたのがホーンビーらの *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (1942) である。この辞書においては、ほとんどすべての名詞に [C] [U] の印がつけられた。ただし、次の点に注意しなければならない。

1. 分かり切った語 (cat, tree など) には記号をつけない。
2. 物質名詞 (wood) や抽象名詞 (bravery) でも [C] になることがある。

3. 名詞を単数で使うか複数で使うかの判断が困難な場合 (clothes, snow, rain) には注をつける。

このような注意を与えても、日本人には不明な例 (law, misunderstanding, regard, satisfaction) や英米人自身にもはっきり説明できない例 (sympathy) が依然として残るのが実状である。それだけ、可算・不可算の認定は複雑だということがわかる。

このレーベルを最初に本格的に導入した辞書は『明解英和辞典 (新訂版)』(三省堂, 1950) であろう。ただし、すべての名詞にこのレーベルがついているわけではないし、C,Uの表示があることも注目したい。この辞書は非常に先進的で発音は米音を先に示した。この表記の略歴からもわかるように、可算・不可算の表記は英和辞典を理解から発表の道具とすることを目指していた。その方向を促進したいと考えたのがパーマーである。しかし、その後の英和辞典の歴史を考えると、この表記は必ずしもパーマーたちの目論み通りには利用されなかった。

#### 4. 動詞型表示 (1960 年代)

パーマーは *A Grammar of Spoken English* (1924) の Part II で述部について次のような記述を行った。例えば、連結動詞の後には次のような表現がくるというのである。

*Subject-complement Predicates.*

a. *Adjectives.*

b. *Noun-equivalents.*

c. *Prepositional Phrases.*

d. *Adverb-complements.*

ここで重要な点は、動詞型を言語構造の問題として取り扱っていることである。この動詞型は次第に実践的なものに変貌する。パーマーは外国語学習に5つの段階を想定した。その最後に「類推によって文を作る段階」を設定した。彼の学習理論によると、語彙は無限であるが英語の構造項目や構文は有限で、それを取捨選択し簡単なものから難しいものへと組み立て学習させるべきで、その型 (pattern) に各種の語や表現を置換 (substitution or conversion) して英文操作能力をつけるべきだということである。彼は1934年秋の語学教育研究所の第11回大会において、*An Essay in Lexicology in the form of Specimen Entries in some possible New-Type Dictionary* を発表した。英語辞書はいかなる方針で編纂すべきかを具体的に示したこの46頁の報告のなかで、いくつかの用語を使い辞書記述

の実例を提示した。この中に Construction Formula という重要な概念がある。具体的に2例を示そう。

ask (×DIRECT OBJECT) × DIRECT OBJECT  
the same [such] (×NOUN) × as × VARIOUS

パーマーはすべての品詞の語についてその用法・構造をできるかぎり定式化し符号などを用いて公式のように示そうと目論んだ。この定式化で突出したのはもちろん動詞型である。

パーマーにおける動詞型の考えは *The New Method Grammar* (1938) でより具体化し実践的なものとなる。この著作は英文の構成法を教えるものである。第10章から第16章で文の要素とその構成法について述べている。第10章では、文をまず主部と述部に分け、さらに述部 (PREDICATE) を述語動詞 (FINITE) と補語 (COMPLEMENT) に分けた。第11章で、4文型を提示した。ここに英語教育を念頭においたパーマー動詞型の起源を見ることができる。

*A Grammar of English Words* (1938) において、パーマーの動詞型の概念はより明確になり不備も幾分解消される。27の動詞型のうち最初の5つを示す。

1. Verb × 0
2. Verb × Subject Complement
3. Verb × Adverbial Complement
4. Verb × Direct Object
5. Verb × Preposition × Prepositional Object

そこで提案された27の動詞型がパーマーの動詞型として最終的なものであると考えてよい。

ホーンビーも独自の動詞型を構築しようと O. Jespersen: *Analytic Syntax* (1937) を研究したと述懐している (『英語教育』第18巻第10号, 1970, p. 72)。しかし、彼の動詞型はパーマーに範をとっていると考えるのが自然である。ただし、両者の相違点は意外に大きい。第1に、ホーンビーの動詞型はパーマーほどレベルを異にする言語単位の混在がない。パーマー動詞型においては、語のレベル (for, so), 品詞のレベル (verb, adjective), 品詞相当のレベル (infinitive, clause), 文の要素のレベル (subject complement, adverbial complement) などが混在する。第2に、ホーンビーのものはより精密である。パーマーは表層的な構造に従って動詞型を設定し、ホーンビーは深層的な構造によって動詞型を設



定しようとした。このため、いくつかの動詞型においてさらに下位区分が行われた。換言すれば、ホーンビーは動詞型を英語の言語構造の問題として把握したが、パーマーは英語教育における 1 教材としてとらえた。

このようにみえてくると、ホーンビーの動詞型はパーマーの動詞型を継承したという言い方は避けたほうがよいかもしれない。それぞれが依拠している考えの源は大きく異なるからである。二人は共同で仕事を進める機会があったが、この面において意見は一致しなかった。ホーンビーの言語構造の深層に迫ろうとする分析は、英語教育を念頭においたパーマーの表層的な態度と軌を一にするものではない。ホーンビー自身がその違いを最も強く感じ、自らの動詞型の原点をパーマーだと認めなくなかったのではないかと想像される。そのために、イエスペルセンを持ち出したと考えるのは穿った見方であろうか。

パーマーにおける動詞型の発展は、異なる動詞型を量的にどれだけ増やすかの問題である。パーマーにとって、動詞型の数の増加は教材レベルの上級化を意味する。これに対して、ホーンビーの動詞型は分析が進めば進むほど質的に深まっていく。しかし、辞書における動詞型表示が細分化精密化することが、利用者にとって有益だと単純にはいえない。その証拠に、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* は 3 版 (1974) において動詞型の数は増やさず細分化したが、4 版 (1989) では精密な動詞型表示を放棄した。動詞型は表層的な違いだけに注目するほうがより賢明だという考えに基づくのであろう。これは、パーマーの考えへの回帰だともいえる。

なお、ホーンビー式の文型を最初に取り入れた英和辞典は『英和中辞典』(小稲義男他, 1967) である。それ以降の学習英和辞典には不可欠の辞書情報項目となったが、文型表示の方法が辞書によって大きく異なる。ホーンビーが (P 1) (P 21, 22, 24) のように番号を用いたのに対して、今日の英和辞典の多くはより分かりやすい方式を採っている。この流れはパーマー動詞型の再評価につながるものである。

## 5. コロケーション (1980 年代以降)

現在日本で使われている「コロケーション」の概念と昭和初期のものとは大きく異なる。我国において、初めて collocation の語を意識的に用いたのはパーマーであろう。彼は 1932 年に語学教育研究所から *First Interim Report on English Collocations* を発表した。彼は collocation を 2 つ以上の単語が 1 つの単語のように使われるために 1 語 1 語を切り離さずまとめて覚えるべきものと考え、次の 7 種に分類した。なお、'collocation' は「連語」と訳された。1. 動詞連語, 2. 名詞連語, 3. 決定詞連語, 4. 形容詞連語, 5. 副詞連語, 6. 前置詞連語, 7. 連結詞連語 (to the effect that, and yet, how about, in short, etc.) で

ある。7以外の具体例は次の分類を参照していただきたい。

パーマーは *Second Interim Report on English Collocations* (1933) でこれらをさらに細分化した。具体例を掲載したい。上の「連結詞連語」が2つに分かれた。

連語の種類	下位分類の数	具体例の一部
動詞連語	30	grow up, believe in, come in sight, come true, get ready for
名詞連語	14	ear phone, day's work, dining room, dark room, canned food, down train, pair of gloves, way out, pen and ink
決定詞連語	4	a few, no more, both of, a lot of, the most, all but, a great deal
形容詞連語	5	well-known, deaf and dumb, fast asleep, snow-white
副詞連語	11	at dinner, for a while, at the service of, last Sunday
前置詞連語	7	in front of, far from, owing to
接続詞連語	3	in order that, in case, considering that, as if, as soon as
疑問詞連語	3	how much, what time, for what reason, how about, which one

既に述べた *An Essay in Lexicology in the form of Specimen Entries in some possible New-Type Dictionary* (1934) において特に注目されるのは Construction Formula と Collocation である。パーマーはこの報告書において idiom (idiomatic) という語を使うことをひどく嫌っている。この表現が余りにも頻繁に使われ実体を持たなくなっていると考えたからであろう。そこで、collocation という語を用いる。KEEP の項をみると、collocation の例として次のようなものが挙がっている。To keep one's promise [word], to keep a secret, To keep step, To keep time, To keep the peace, To keep faith, To keep watch, To keep one's temper, To keep order, To keep good hours, To keep bad hours である。これらの例からも、彼が collocation として把握する語と語の関係がかなり広いことがわかる。

これらの例が示すようにパーマーが collocation と呼んでいるものは、むしろ今日の英語教育界でイディオムと規定されているものに近い。では、コロケーションとは一体何だろう。ここに、連語 (collocation) を理解の難易度 (intelligibility) から3つに分ける見方がある。

#### 1. Abnormal Collocation (特異連語)

構成要素から連語の意味が全く想像できないもの

(例) by and by, for good, once upon a time

2. Semi-normal Collocation (半特異連語)

構成要素から連語の意味は想像できるが、そのつながりが固定しているもの

(例) take steps, turn one's attention to

3. Normal Collocation (通常連語)

構成要素から連語の意味が想像でき、そのつながりは比較的自由なもの

(例) write a letter, build a house

連語を理解の難易度だけで見るのは余りにも皮相であるが、当面の議論にはこれで充分である。今日イディオムと呼ぶものはほぼ1と2で、3がコロケーションに近い。

次に、Construction Formulaについて再度考えよう。その具体例はすでに見た。その1つはいわゆる動詞型を示したもので、その後大きく発展する。動詞型とは動詞の後にどのような語が連なるかを表示したもので、コロケーションの問題と直結している。このようなパーマーの趣旨を具現化したものが*A Grammar of English Words* (1938) である。このパーマー辞書は基本1千語の説明に重点を置いている。パーマーは、話し言葉と書き言葉の両面においてイギリスの現代英語として代表的なものを例文として豊富に載せた。コロケーションを強く意識した例文の配列が行われているわけではないが、その動詞が用いられる動詞型や文型を漏らすことなく示したいという意図は読み取れる。remain では8の用例で次のコロケーションを示そうとしている。

1. If you take (away) 7 from 10, 3 remains. See V.P. 1

If you take (away) 7 pieces from 10, 3 remain.

Nothing remained of it [them, etc.].

After the fire nothing [little, hardly anything, etc.] remained of the house.

You may have all those that remain.

2. I shall remain [stay, stop] here all the summer.

3. He remained a poor man. See V.P. 2

He mained poor all his life.

日本において独自に英語コロケーション辞典が誕生した契機の1つとして、このパーマーの動詞型の問題を見逃すことはできない。動詞を始めとする各種語彙がどのような型で用いられるかを語彙文法 (word grammar) の問題として辞書に記載した。それぞれの動詞はどの動詞型で用いられるかを辞書に示した。この動詞型 (時には形容詞型) を除外したものとしてコロケーションは理解されるようになった。

1939年に世界的に注目される『英和活用大辞典』が生まれた。これは英語コロケーション辞典である。この辞書には広く常用される次のパターンのもとに多くの用例が集められている。

【名詞の代表的パターン】(名詞は最も主要な語で最も重きを置く)

動詞＋名詞

形容詞＋名詞

前置詞＋名詞

【動詞の代表的パターン】

副詞＋動詞

動詞＋副詞

動詞＋前置詞

【形容詞の代表的パターン】(見出し語として収録の形容詞は少ない)

副詞＋形容詞

形容詞＋前置詞

【副詞の代表的パターン】(overなど見出し語として収録の副詞はきわめて少ない)

副詞＋副詞

副詞＋前置詞

これらのパターンに入り切らないものは「其他」として最後に掲載される。このパターンのなかで特に動詞に注目したい。勝俣の「動詞の代表的パターン」は次の2つの観点から見る必要がある。勝俣のパターンは余りにも単純なのでその後の改訂において多少複雑になったが、この単純さが利用者の使い易さにつながることを忘れてはならない。即ち、パターンを学問的に細分化しそれに従って用例を配列したとしても、利用者には使い易いものになるとは限らない。もう1つが本質的問題である。勝俣の動詞連語パターンはパーマーの提案する動詞型とまったく異質のものである。勝俣の動詞パターンはすべての動詞を念頭において動詞を中心とした語連結の典型を示したものに過ぎない。基本的に、これは個々の動詞を問題とする動詞型とはレベルの異なるものであり、勝俣はそのことをはっきり認識していた。この認識に彼が到達したことにパーマーの *A Grammar of English Words* (1938) に至る研究や著作が大きな役割を果たしたと思われる。

コロケーション辞典は、熟語の配置配列の問題意識を推し進めるなかで熟語の概念をより明確に厳密にするとところから誕生した。このような辞書史における事実は、上表からもわかるようにイディオムとコロケーションは境界の明確でない連続体であるという言語事

実にも即している。勝俣は、最初、コロケーションという用語を用いていなかったが、パーマーが日本でその語を用い英語教師の間に広まるようになって、語連結の問題をコロケーションと呼ぶようになった。増田貢 (1959, p. 461) によると、勝俣銓吉郎はパーマー来日以前は、collocation という用語ではなく idiomatic combination という用語を用いていた。むしろ、次のように述べるのが適切かもしれない。勝俣は広い意味での熟語の配置配列法を模索するなかで、パーマーのコロケーションの概念に遭遇し、自らの問題意識がより鮮明となり、コロケーション辞典の基本構想に到着したと思われる。パーマーの分類などを通し、勝俣は多くの示唆を得て、『英和活用大辞典』の構想につなげたと思われる。

日本における英語コロケーションへの強い関心は、学習英和辞典にも徐々に反映していった。1983 年に出版された『グローバル英和辞典』(佐々木達・木原研三・福村虎治郎) は、少ないスペースにもかかわらずコロケーションに力を入れた画期的な辞書である。他の同種のものと比べるとこの面における記述は多い。例えば、near という語が形容詞として名詞を修飾する例としては次のようなものがある。

in the near future	a near guess
near sight	a near resemblance
take a near view of . . .	a near silk
a near friend	a near man
a near victory	the near side

この辞典では 18 もの例が示されているのに対して、『ニューアンカー英和辞書』(柴田徹士, 1988) では 11 の用例、『ライトハウス英和辞典』(竹林滋・小島義郎, 1984) では 8 つの例しか載っていない。この差は歴然たるもので、編纂者の意欲が読み取れる。しかし、高校生用の英和辞典にコロケーションの記述がどれくらい望めるだろうか。量や紙面の問題がある。これに関する情報が多くなることは大いに喜ばしいことであるが、それだけ他の情報(例えば、文化や語法に関する情報)が削られる可能性は大きい。

## 7. むすび

戦後の学習英和辞典が目指してきた「厳密な発音表記」「基本語の記述充実」「重要語の段階表示」「コロケーション表示」「文法情報の提示」(名詞の可算・不可算の表示、動詞型など)はすべてパーマーが手掛け、その基礎を築いた。そしてホーンビー辞書において開花した。二人が目標としていた辞書は基本的に発信型の辞書で、英語を外国語として学ぶ

日本人が基本語彙を使つて的確に自己表現をする際の指針となることを目指していたからこそ、英和辞典の発展に寄与することとなった。また、パーマーは教育現場を念頭に置き実践的に思考した。このため、彼の提案した概念はきわめて経験主義的で理論性が乏しいものとなった。しかし、それだけ英語教育現場には利用価値が高い。1990年代以降の辞書編纂は、より user-friendly を指向している。学習者を辞書編纂の中心に据えたパーマーの考えを見直す必要がある。

### 参考文献

- Al-Kasimi, Ali M.: *Linguistics and Bilingual Dictionaries*. Leiden: E. J. Brill, 1977.
- Béjoint, Henri: "The Foreign Student's Use of Monolingual English Dictionaries: A Study of Language Needs and Reference Skills," *Applied Linguistics* Vol. II, No. 3 (1981) pp. 207-222.
- Benson, M., E. Benson and R. Ilson: *Lexicographic Description of English*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 1986.
- Cowie, Anthony P., ed.: *Lexicography and Its Pedagogic Applications*. *Applied Linguistics* Vol. II, No. 3 (1981).
- Cowie, Anthony P.: "The Pedagogical/Learner's Dictionary," in *Lexicography: Principles and Practice* (R. R. K. Hartmann, ed. London: Academic Press, 1983) pp. 135-152.
- Cowie, Anthony P.: *English Dictionaries for Foreign Learners: A History*. Oxford: Clarendon Press, 1999.
- 語学教育研究所編『外国語教授法』開拓社, 1943.
- Hartmann, R. R. K., ed.: *Lexicography: Principles and Practice*. London: Academic Press, 1983.
- 早川 勇 『英文法の新しい考え方学び方 新丁版』三友社出版, 1985.
- 早川 勇 『英語辞書へのプロムナード』三友社出版, 1990.
- 早川 勇 「英語辞書における可算・不可算表示の歴史—ホーンビーの辞書を中心に」『現代英語教育』第31巻第3号 (1994) pp. 44-46.
- 早川 勇 『辞書編纂のダイナミズム』辞游社, 2001.
- 早川 勇 「国際音声字母の誕生と日本における受容」『文學論叢』愛知大学文學会第132輯 (2005) pp. 1-19.
- 早川 勇 『日本の英語辞書と編纂者』春風社, 2006.
- 東 信行 "A S Hornby, *Guide to Patterns and Usage in English*, Second Edition," *LEXICON* 第5号 (1976) pp. 88-99.
- Hill, A. A.: "The Use of Dictionaries in Language Teaching," in *Readings in Applied English Linguistics* (H. B. Allen, ed. New York: Appleton-Century-Crofts, 1958) pp. 439-443.
- Hornby, A. S.: *A Guide to Patterns and Usage in English*. London: Oxford University Press, 1954.
- Hornby, A. S.: "With A. S. Hornby —An Interview during His Recent Visit to Japan" 『英語教育』第18巻第10号 (1970) pp. 70-74.

## 20 世紀學習英和辭典

- Householder, Fred W., and Sol Saporta, eds.: *Problems in Lexicography*. Publications of Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics, 21. Bloomington: Indiana University Press, 1962.
- Illson, Robert F., ed.: *Dictionaries, Lexicography, and Language Learning*. ELT Documents, No. 120. Oxford: Pergamon, 1984.
- Illson, Robert F.: *Lexicography: An Emerging International Profession*. London: Manchester University Press, 1986.
- 伊村元道 『パーマーと日本の英語教育』大修館書店, 1997.
- Jespersen, Otto: *A Modern English Grammar on Historical Principles II*. Heidelberg: Carl Winter, 1914.
- Jespersen, Otto: *Analytic Syntax*. London: George Allen & Unwin, 1937.
- 木原研三・正岡圭子 「学習英和辞典の流れ」『現代英語教育』第9巻第13号 (1973) pp. 10-11.
- 小島義朗 「A. S. ホーンビーと *ISED, OALD*」『英語展望』No. 84 (1985) pp. 44-49.
- Lemmens, M. and H. Wekker: *Grammar in Learners' Dictionaries*. Lexicographica Series Maio 16. Niemeyer: Tübingen, 1986.
- 増田 貢 「語・句・文の研究」『英語青年』第105巻第12号 (1959) pp. 461-462.
- 大西雅雄 『パーマー博士と英語教授理論』開拓社, 1969.
- Palmer, Harold E: *A Grammar of Spoken English on a Strictly Phonetic Basis*, Cambridge: W. Heffer and Sons, 1924.
- Palmer, Harold E.: *An Essay in Lexicology in the form of Specimen Entries in some possible New-Type Dictionary*. A Report to the Eleventh Annual Conference of the I.R.E.T. Tokyo: Institute for Research in English Teaching, Department of Education, 1934.
- Palmer, Harold E.: *The New Method Grammar*. London: Longmans, Green and Co., 1938a.
- Palmer, Harold E.: *A Grammar of English Words*. London: Longmans, 1938b.
- 高橋 潔他 「*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, Fourth Edition の分析」*LEXICON* 第22巻 (1992) pp. 59-200.
- 竹林 滋 「二か国語辞典編集における問題点」『*PHILOLOGIA ANGLICA* 寺澤芳雄教授還暦記念論文集』(研究社, 1988) pp. 467-475.
- 竹林滋他 「*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* の分析」*LEXICON* 第4号 (1975) pp. 68-114.
- Tomaszczyk, Jerzy: "Issues and Developments in Bilingual Pedagogical Lexicography," *Applied Linguistics* Vol. 11, No. 3 (1981) pp. 287-296.